

平成26年9月28日(日)

老球の細道66号 『究極のコミュニケーション』

会津バスケットボール協会理事長 室井 富仁

子どもたちの体力低下が叫ばれている今日、簡単な解決方法があると豪語する東京大学のある教授がいる。その教授曰く「東大の入試に体育の科目を入れればいい」。なるほど、東大の入試に体育の実技試験が入れば、必然的に運動をする東大の受験生が増える。そして、東大がそのような入試制度にすれば他の大学も右ならいするのは予想できる。したがって、現在のように運動することをやめて勉強だけに受験準備をすることはなくなり、運動しながら勉強もするという本来の少年の理想の姿になる。その結果、子どもたちの体力低下も自然に解決するということである。なるほど・ザ・ワールド!

ところで、今回言いたいことはそんなことではない。バスケットボールと同じように通信も、たまにはフェイントをいれないと面白くない。この東大教授の著書『賢い脳をつくるスポーツ子育て術』(誠文堂新光社)を最近読んだ。その中に三つのコミュニケーションパターンにプラスする新たな内容があったので紹介したい。

今まで私が考えていたスポーツにおけるコミュニケーションとは、あくまでも「オレ流」である。一つは、モチベーションアップ。気持ちを奮い立たせる大きな声を掛け合うことでチームに勢いをつける。二つ目は、コーチング。やって欲しいプレー、やりたいプレーをチームメイトと指示し合う。そして三つ目は、シチュエーション。戦術や作戦などをプレー中や作戦タイムにおいて確認し合う。その道の専門家に言わせれば勘違いもはなはだしいのかもしれないが、もうこの年になると我流のガリガリ君で気にしない。

コミュニケーションのもう一つのパターンとは「究極のコミュニケーション」(オレ流のネーミング)という。それは、試合で負ける決定的なミスをした失意の友達にどのような声かけをするかということである。

野球なら9回裏2アウト。1点差リードの場面で、チームメイトがエラーをして、2点が入り逆転負け。サッカーなら同点のままにPK戦に突入。チームメイトのPKが外れて負けてしまった。バスケットボールなら1点リード、残り時間6秒でサイドラインからのスローイン。チームメイトがパスをカットされてシュートに持って行かれ逆転負け。

スポーツの経験者ならこのような場面を何度も経験してきただろう。自分がその当事者だったり、またはチームメイトが当事者だったり。このような時に、そのミスをした当事者にどのような声かけをしたらよいのだろうか。または、自分が当事者だったら、どのような声かけをして欲しいのだろうか。今までそんなことを真剣に考えたことはなかった。

「お前のせいじゃない、たまたま最後がお前だけだよ。次がんばろう」と言ってなぐさめるか。なぐさめてもらいたいのか。「お前のせいで負けたんだぞ!」とくやしさをぶつけるか。喝を入れられたいか。「声をかけない」という選択肢もある。ほおっておいてほしいと思うか。

スポーツの場だけでなく色々な場において、失意に悩む友人、知人にどのような声かけをすることができるか人間関係の真価が問われる場面である。正解のないコミュニケーション問題であるが、自分の考えを持てるよう日々悩み、考え、学習しなければならない。

それよりも、コートの中で黙秘権を使いながら、黙々と試合をして、試合が終わればウソのようにおしゃべりをするセーガル主演『沈黙のバスケットボール』をなんとか・・・